

慰安婦報道検証自体の検証ができなかった組織ジャーナリズムの限界

朝日の慰安婦・吉田調書問題に対して、『日本を拠点に取材しているベテラン記者2人に聞いた。【聞き手・青島頭(写真も)、中西啓介】』という毎日の記事(14.10.6)もみられる。

◇歴史の修正に悪用も ― 独フランクフルター・アルゲマイネ東アジア特派員、カーステン・ゲアミス(55) ―

《私は任天堂社長のインタビュー記事の件で朝日新聞に警戒感を持った。従軍慰安婦や福島第1原発の問題に比べて大きく報道されなかったが、社長に会っていないのに記事にしたことは本質の問題で、あってはならないことだ。びっくりした。

朝日が8月に慰安婦問題の記事を取り消し、検証記事を出したときは、なぜ今なのか疑問だった。私は以前に韓国人の元慰安婦4人に会い、オランダの議会にメールを送るなどして慰安婦問題を調べたことがある。だから、(朝日新聞が証言を取り上げた)吉田清治氏(故人)が目撃者のふりをして、うそをついていたとしても慰安婦がなかったことを意味しないことを知っている。そもそも私は吉田証言自体を検証記事が出るまで知らなかった。私の調査に吉田証言は必要なかったからだ。

福島第1原発の所長に対して政府の事故調査・検証委員会が聞き取った「吉田調書」についての報道でも朝日は記事を取り消したが、私は朝日の初報を引用した記事を書いていなかった。ドイツの新聞の読者が関心を払うようなものではなかったからだ。

大切なのは、政府が原発で起きていることを説明することであり、原子力規制委員会が本当に独立して安全性や再稼働の是非を評価できる体制になっているかどうか、ということだ。

メディアが他のメディアの問題を報じることは構わない。ドイツでも大手のシュピーゲル誌の内紛を他のメディアが記事にした。ただし、メディア同士の批判は慎重であるべきだ。日本のメディアが朝日問題をあまりに大きく取り上げたことには奇妙な感じがした。この問題が歴史修正主義に都合良く利用されるのは問題だ。日本に対する国際的な不信を高める要因になると感じる。

ニュースのバランス感覚が崩れているような気がする。一昨年、17万人(主催者発表)が参加した反原発の抗議行動は、私の新聞でさえ大きく写真付きで取り上げたのに、日本の新聞の中にはほとんど無視したところもあった。

私の理解では、ジャーナリズムの役割は政治、経済、議会などと読者の関心との間にある隙間^{すきま}を埋めるため、正確に報道する独立した機関であること。そして権力を監視することだ。ジャーナリストは、常に読者のことを考えるべきだ。(談)》

◇情報公開求め続けて ― 米ニューヨーク・タイムズ東京支局長、マーティン・ファクラー(47) ―
《朝日新聞が5月20日に書いた福島第1原発の「吉田調書」の記事を読んで、私はすぐに「朝日新聞によると」という形で記事を引用して報じた。しかし私は「原発所員が(吉田昌郎元所長の)命令に違反して撤退した」という朝日が強調した部分よりも、約400ページの調書が開示されずにきたことの方を中心に書いた。

吉田調書に関して問われるべきなのは、政府がこのような重要な資料の公開に消極的な姿勢であることだ。それなのに朝日はなぜ「パニック」の方に焦点を当ててしまったのだろうか。それがなくてもスクープとして十分なインパクトがあったのと思う。

新聞が失った信頼を取り戻すのは大変だ。ニューヨーク・タイムズも2003年に若い記者が取材していないことを記事にしたことがある。イラク戦争をめぐっては、政権が主張する「大量破壊兵器」の存在を信じてしまった。

その二つの問題で傷ついた信頼を、いまだに回復できずにいる。信頼を取り戻すには、当局に寄りかかることなく読者のための記事を書いていくしかないのだろう。

一方で政府事故調査・検証委員会は吉田調書の他に771人分の調書を作っている。日本のメディアは771人の調書の公開を求め、原発事故時に何が起こったのかを国民に伝えるべきだ。朝日新聞を批判しているうちに、根本的な問題から国民の目をそらしてしまってはならない。

従軍慰安婦についても、朝日新聞の記事取り消しによって報道が自粛気味になっているのが残念だ。批判を恐れず、根拠のある事実を取材して正しい知識を冷静に届けてほしい。慰安婦の存在自体がなかったかのような議論もあるが、それはかえって日本の「国益」にならないのではないか。

メディア同士が、記事の内容をめぐって厳しい批判をするのはよいことだ。しかし「非国民」などの極端な表現を使って感情をあおるような批判をするのはやりすぎだ。そうした風潮には全体主義的な怖さを感じる。ジャーナリストは自由な言論を萎縮させるものに抵抗すべきなのに、どうしたことかと思う。

日本は、アジアで一番の勢いを誇っていたころの自信を失い、中国や韓国の台頭に余裕をなくしているように感じる。そうした雰囲気が、標的を作って感情のはけ口を求める行動につながっているのかもしれない。(談)》

「ニューヨーク・タイムズの捏造問題」とは、《2003年5月、当時27歳の男性記者が記事を捏造^{ねつぞう}したとして同紙は5ページにわたる詳細な調査結果を報じ、謝罪した。前年10月以降に少なくとも36本で、実際に会っていない取材対象者の様子や談話を創作したり、他紙の記事を盗用したりしていた。》この事件を題材にした『ニュースの天才』という映画も作られている。

さて、池上コラムについても一度取り上げれば、朝日の慰安婦報道検証に関して朝日の連載コラムで、「検証の不十分さ」と「謝罪」を真正面から突きつけることによって、ジャーナリストとしての役割をきちんと果たしたことはいうまでもない。朝日の連載コラムで書くことを避けて、他のメディア媒体で書くのではなく、朝日が取り組まなければならない問題をきちんと朝日の紙面で書くことによって、池上コラムはジャーナリストとしての義務と責任を引き受けたといえる。

紙面を提供してくれている長年の好意に背くようにみえる朝日批判を一瞬ためらったかどうかはわからないが、そのような「善意の関係」に拘束されることなく、池上コラムはいまここで朝日批判を回避すれば、これまで続けてきた「新聞ななめ読み」は「新聞そらし読み」になると思って、朝日批判を敢行したのかもしれない。池上コラムが書かれるにふさわしい朝日の紙面であることを願って、そうしたように思われる。そうでなければ、朝日と共に池上コラムも失墜してしまうからだ。

もちろん、実際そうであったように、はじめて朝日から掲載拒否―書き換えを通告されることもありうる。予測していなかったとは思われないが、たとえそうであったとしても、自粛することなく、自分の考えを主張するコラムを朝日に提出したことが大事であった。

いまふと思うのであるが、池上コラムが朝日にとって意に添わない原稿であり、その是非はどうであれ、書き換えの事態に至らなかったとき、朝日からすれば決定権を行使する権力者的な掲載拒否の方法ではなく、池上コラムを掲載する一方で、朝日としてはそのコラムの主張は受け入れられないものであるが、そのような主張がありうることを否定するつもりはないので、これまでどおりの連載として掲載する。読者は朝日の主張とコラムの主張を対比しながら、自由に判断して意見を届けてくださることを要望する、という註を付して掲載する方法もあったのではないだろうか。

しかし、その方法を選択すれば、なぜ朝日にとって池上コラムは意に添わないのか、つまり、「検証の不十分さ」と「謝罪」が不要である理由を説明しなくなってしまう。だが朝日は、企業論理上そんな説明はできない。そうであるなら、慰安婦報道検証という特集が組まれた時点で「検証の不十分さ」と「謝罪」のなさが必然的にかかえこまれている以上、その二点に立脚した批判が外部で高まるにつれて、その外部批判が朝日の内部に着床するにいたるのは時間の問題であったといえる。

池上コラムが連載の巡り合わせで「時間の問題」を把握することによって(よい意味での)「獅子身中の虫」となったが、もちろん、「時間の問題」を把握するのは池上コラムではなく、朝日における他の執筆者であってもよかったのである。要するに、池上コラムでなくてもよかったところで、池上コラムが「時間の問題」を把握することになったが、そのことについて、週刊文春連載のコラム〈「掲載拒否」で考えたこと〉(14.9.18)で次のように語っている。

冒頭で朝日を《批判しながらも、「お前は、そんなに偉そうなことが言えるだけのことをしてきたのか」と自らに問いかける声が聞こえる》と書きながら、朝日批判は(今後の)自分に対する批判の意味をも帯びていることを示唆して、《自分のコラムが掲載される媒体を批判するのは、まことにしんどいこと》であると、心中を吐露している。

《どの組織でも、自分を批判されることは不愉快なもの。まして、その批判文を読者に読まれるようにするというのは、自己否定につながりかねない大変なことです。「お前はそれを強要するのか」という内なる声が聞こえて》くるし、自社の不都合は朝日にかぎらずどの社、局も同じであることを考えて、《忸怩たる思い》がする一方で、《新聞は報道機関。報道の自由、表現の自由を主張しながら、依頼原稿をボツにするのはどういうことか、という憤り》もあったと述べ、この件の外部流出は朝日内部からの週刊新潮への「内部告発」であることをほのめかす。